

「流星ひとつ」

幼稚園くらいの時だったでしょうか、テレビに出ている女性がとてもキレイで、ドキドキしたことがありました。それが藤圭子。今の人には宇多田ヒカルのお母さんと言った方が分かりやすいでしょうね。

「この子、可哀想な子やろ」親せきのお婆さんが、そう言ったのもよく覚えています。

その藤圭子の芸能界引退の真相が描かれている「流星ひとつ」、沢木耕太郎が書いたインタビュー形式のノンフィクションに感動した高野です。藤圭子が引退した28歳当時、そのまま出版されていたら、とんでもない話題作になっていたことでしょう。

今読んでも内容は衝撃的。それがどういう訳か、完成した本を読んで、著者である沢木氏自身が「藤圭子を利用したのではないか？」という感覚に襲われ、発行を見送るのです。プロの作家が、そんな決断をすることにも驚きですが、なんと、それから30年以上封印するのです。

そして藤圭子が亡くなり、「もし『流星ひとつ』を読むことがあったら、宇多田ヒカルは初めての藤圭子に出会うことができるかもしれない・・・」と発行を決意するのです。

貧乏暮らしの中、盲目のお母さんを助けたい一心でデビューを目指す藤圭子の姿に胸が熱くなります。そして周囲は彼女の生い立ちを売りだしの材料にします。浪曲師の両親とのドサ回り生活。上京してからのネオン街での流しの生活。本人は、それを大した苦労ではなかったように語っているけど、それがかえって痛々しく、何ともいえない気分になります。

また、有名歌手やプロ野球選手との色恋も赤裸々に語られるのですが、ゴシップ的な面白さではなく、職業人としてのプライドや、人間本来の純粋さ、潔さ、選択の美しさが、この人の言葉の端々から見えてきます。

またたく間に彼女の歌は一世を風靡し、「演歌」ではなく「怨歌」と評されるのですが、28歳で一度引退、渡米。後にロックやR&Bに目覚め、それが宇多田ヒカルの楽曲へと受け継がれるのです。

奇しくも同じ28歳で「人間活動をしたい」と一度引退する宇多田ヒカルは何から何までお母さんとそっくりなのにも唖然とします。

最後に珠玉の一文は、あとがきより。

「美しかったのは『容姿』だけではなかった。『心』のこのようにまっすぐな人を私は知らない。」

純粋で、流れ星のように生きた女性の素晴らしい物語です。